

◆伊藤洋二 選 ～山口素堂の俳句より～

椎の葉にもりこぼしけり露の月

液体の表面張力には毎度お世話になっている。一合升入りのコップ酒のあの膨らみ。当然ながら口からお迎えに行く至福のひと時。万葉集巻二(一四二)の「家であれば筥に盛る飯を草枕旅にしあらば椎の葉に盛る」。謀反の罪で護送される途中、故郷に残した大切な人を偲んでの有間皇子の歌である。涙が椎の葉に零れ、玉の露となったかもしれない。筆者も一句。のり弁にワンカットなり月朧。

めでたさや星の一夜も朝顔も

元禄五年、素堂の母の喜寿を祝う宴が開かれた。「七十あまり七年の秋七月七日をことぶくに万葉の七種をもて題とす」として、集まった七人が秋の七草で句を詠んだ。

七株の萩の手本や星の秋	芭蕉
織女に老の花ある尾花かな	嵐蘭
布に煮て余りをさかふ葛の花	沾徳
動きなき岩撫子や星の床	曾良
けふ星の賀にあふ花や女郎花	杉風
蘭の香にはなひ侍らん星の妻	其角

七づくしの誠に風流、豪華な句会である。

水甕を汲干すまでに月澄て

筆者の住む愛媛県西条市は、瀬戸内海式気候で夏の雨が極端に少なく、度々、旱魃に見舞われた歴史がある。今は先人のご努力で完成した面河ダムが、道前道後の穀倉地帯に灌漑用水を供給する水甕となっている。一斉清掃を終えた用水路のバルブは、「歓喜の歌」を奏でているよう。♪晴れたる青空ただよう雲よ 小鳥は歌えり林に森に♪

◆荒井良明 選

《立正大師日蓮もきつと笑うやこの句にて》

赤い根のところ南無妙法蓮華草

川崎展宏

平成二十一年十一月二十九日に八十二歳で逝去された川崎展宏の句。これが「南無妙法蓮華経」と「南無妙法蓮華草」の語呂合わせの句であることにはお気づきになるだろう。子どもの頃、ほうれん草の赤いところを食べずにいると、父が「鼠はその赤いところしか食べない。そこに栄養がつまっている」と言っていたのを思い出した。

《「象潟や雨に西施がねぶの花」にも比すべき》

かたくりは耳のうしろを見せる花

川崎展宏

「象潟や」の句は、言わずと知れた芭蕉の名句。ねむの花が雨に濡れて咲く趣は、西施（せいし＝中国春秋時代の美女）が、もの思わしげに目をつぶっている風情を思わせることだ、との意味である。

川崎展宏の掲句を、私は芭蕉の「象潟や」の句にも比すべき名句だと思う。「耳のうしろを見せる」のは、かたくりの花であろうが、作句者の視線はかたくりの花の中に、美しい人の（あるいは思われ人の）「耳のうしろ」をも見ている。♪君を花に例えたら笑うだろうか／白いユリのようにだと云えば／胸の炎に気づいてないと／戸惑うだろうか♪（小椋佳作詞「憧れ遊び」より）。男はいつでも女を花に例えたがる。

《辞世にも滑稽・諧謔精神》

ころぶ人を笑ふてころぶ雪見哉

千代女

こんな滑稽句を残した加賀千代女。千代女は、一七七五（安永四）年、九月八日に亡くなっているが、辞世の句にもどこか滑稽さ（諧謔味）が感じられる。

月も見て我はこの世をかしく哉

千代女

「かしく」は挨拶言葉で、「この世におさらばする」という意味。〈かしく【恐・畏・可祝】（カシコの転）「かしこ」④に同じ。／かしこ【恐・畏・賢】④手紙の末尾に書く語。（略）「かしく」とも。多く、女性が用いる。〉（広辞苑 第七版）。

千代女は、「八月十五日の中秋の名月はもちろん、世の中の有様を十分に見尽

くしたので思い残すことはない」。そして、「かしく」という言葉に、「この世でお世話になりました。ありがとう、さようなら」という意味を込めたのだろう。

人魂で行く気散じや夏野原

北斎

「きさんじ」とは、〈【気散じ】心の憂さをまぎらすこと。きばらし。〉（日葡辞書）。あるいは、〈「一に外出する」〉（広辞苑 第七版）ことである。

要するに、「死んだら人魂になって夏野原にハイキングに行く」というのだから実に豪快である。

宗鑑は何処へと人の問ふならば

ちと用ありてあの世へといへ 山崎宗鑑

「用」とは用事という意味であるが、これに、〈よう【癩】皮膚や皮下組織に生じる急性化膿性炎症。〉（広辞苑 第七版）とを掛けて、迫り来る己の死をも笑い飛ばしている。言葉遊びの滑稽であり、辞世ながら諧謔精神のある句である。

（文中敬称略）